

シナブン号で船旅 —マカッサルから西パプアのソロンへ

写真・文
大津伸子
Nobuko Otsu



バウバウ港に入港した全長 144 メートル、14,600 トンのシナブン号

スラウエシ島マカッサルの港からシナブン号に乗り込んだ。一万七五〇〇余の島々の魅力を探るには船の旅が一番と、インドネシアの島々をくまなく運航するベルニ（インドネシア国営船舶運航会社）のリンジャニ号で一五年前に当地からアンボンへ船旅した時のことが鮮明に蘇ってきた。港のターミナルは人、人、人、荷物でこった返し、乗船開始とともに人々が一斉にタラップに向かって突進した。一〇歳の息子の啞然とした姿を記憶している。ターミナルは大型に様変わりしたが、混雑状況は相変わらずだった。折しも断食明けの帰省に重なり、一、二、三等の船室はすべて満室。八〇〇名定員のエコノミー船室から溢れた乗客で各階のデッキの踊り場、廊下は足の踏み場も無かった。何度かベルニの客船に乗船したが、初体験の光景だった。

ここマカッサルは古くから東部インドネシアの海上交通の要所で、空の交通が盛んな現在でも東西を結ぶ中継地点として重要な役割を果している。マカッサルを出港し、まず南東のブトン島のバウバウに寄港後北上し、バンガイ島、北スラウエシのビトゥンに寄り、そこから東に進路を向け、テルナテ、更に東の西パプアのソロンに入る三泊四日の船旅。初めての航路と未踏のソロン行きで気持がワクワクしていた。

世界の船旅に精通し、もちろんインドネシア海域の船旅のよさも熟知しているS氏が同行した。乗船当初S氏はデッキの踊り



マカッサル湾に沈む夕日



東西を結ぶ海の交通要所・マカッサルを防御したロッテルダム要塞



6デッキの一等船室。2ベッド、洗面・シャワー室、机、洋服ダンス、テレビが備わる

場で寝食する乗客、船室の手入れ不足、備品の破損など豪華客船ではありえない有様に驚きと戸惑いの連続だったが、船上での人との出会い、会話、そして限られた時間内の寄港地の観光をするうちに船室のことは時が経つにつれて気にならなくなったという。まだ知らない方々に日本ではあまり知られていないインドネシア島嶼間の人々の足となっている手ごろな料金の船舶に乗船し、船上でのインドネシアの様々な地域の人々との交流、また寄港地での見聞を通してインドネシアの多様な民族、文化に直に触れ、豪華客船とは別の醍醐味を知ってほしいとの思いがあった。

マカッサル湾に沈みゆく夕陽に見とれていると夕食のアナウンスがあり、食堂へ。シナブン号は比較的新しい建造船なのでちょっぴり期待していた。一、二等船室用の食堂はブルーでまとめ、落着いた雰囲気ですますだったが、食事の質の低さには少々がっかりした。

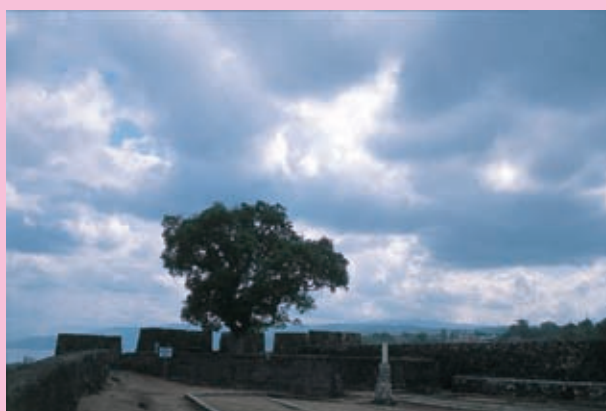
朝八時にバウバウ港に入港。港は見違えるほど整備され、かつて船を待ち構えていたにわか露店が並ぶ面影は無かった。一時間の停泊を利用して交渉成立の若者のोजエック（乗合いオートバイ）の後部にまたがり、以前果せなかった三〇分のバウバウ観光に挑んだ。港の背に迫る丘に駆け上ると、港を一望できる要塞があった。この地は一四世紀以降ブトン王国が栄え、中国、ジャワ島のマジャパヒト王国と貿易を行っ



バンガイ港の人と荷物がひしめく下船の光景



1613年に遡るクラトン（王宮）と右手は初代王のクラトンの大黒柱（ブトン島）



パウバウの丘の上に残るブトン王国の要塞跡

たが、海賊行為、奴隷貿易が中心だった。その後イスラム教国となり、一九〇六年オランダの支配下に入り、インドネシア独立まで続いた。一七世紀建造の王宮とイスラム教寺院が古の栄華の痕跡を留めていた。島内では就業の道は限られ、ブトン人のほとんどが東部インドネシア、特にマルクヘ国内移住か、出稼に出ている。出港の汽笛がボーと鳴り、危機一髪でタラップを駆け上った。

船はブトン海峡を出ると左右に島々を見ながらウオウオニ海峡に入った。船長に食事の不満を訴えた効果なのか、昼食のメニューがよくなっていた。断食月なので日没前の夕食時の食堂は閑散としていた。夜九時にバンガイ港に入り、棧橋から船首がはみ出た格好で接岸。闇に包まれた燈りに目を凝らすと、出迎え、見物人、ポーターがひしめき合っていた。タラップがまだ完全につながらないうちにポーターが一斉に梯段を駆け上った様相に圧倒された。この島はダイビングスポットとして名高いが、現金収入を得る道は限られ、島民の必死の生活がひしひしと感じられた。下船者は電化製品、衣類、マットレス、果ては椅子五脚まで両手、両肩、体をあますことなく使って様々な物品を抱えていた。出港間近に大きな袋を引きずりながらタラップを降りた子供たちを目で追った。彼らは船内で収集した空ペットボトルをボスらしき女に渡し、小銭を受取り、そのかせぎで女の家族が商



東部への物資を供給するスラウェシ島第2の大きさのビトゥン港



●●●●● シナブン号航路



タラップが連結するや否や一斉に駆け上がるポーターたち



ソロンの港に停泊するシナブン号を高台から一望する

う露店で菓子を買っていた。渡したお金が再び懐に戻るうまくできたしくみだ。
船室の冷房から体を温めに時折デッキのカフェに通った。テーブルとベンチ椅子だけの造りで、缶飲料、コーヒー、カップラーメン、弁当、パン、菓子などがあり、結構賑い、日毎に山積み品の品が減っていく。愛想のよいカリマンタン出身ダヤク人の店員は、月二往復のこの航路の仕事を楽しくやっていると言ひ、店番そっこのので私との会話に夢中だった。

一時間遅れでビトゥン港に入港。オレンジ色の制服のポーターがすでに到着を待ち構えていた。下船してゲートをくぐると、マナド、トンダノと遠方へのタクシーの客引きの掛け声が飛び交う。三時間の停泊を利用して市街周辺の観光へ。運転手と助手席のガイドはトモハン出身のミナハサ人で、地震でも壊れない故郷の伝統家屋を誇った。インドネシアのひんぱんな地震災害が念頭にあったのであろう。余裕を持った帰船後が大変だった。甲板の通路を荷物が塞ぎ、船室の窓からも外が見えない。ほとんどが野菜で、野菜不足のパパアに運ぶようだ。

夜中のテルナテ寄港後、航海四日目の朝、ソロンの岬が見えた。波ひとつない穏やかな入江を進む船に身を任せていると、下船のアナウンスがあり、あわてて荷物をまとめ、シナブン号に別れを告げた。

(おおつのぶこ)フリーランスライター & コーディネーター